子宮頸がんワクチンについての説明

≪子宮頸がんとは？≫

子宮の入口付近の「子宮頸部」にできるがんのことで、20代～30代の女性に発症するがんで最も多いがんとなっています。子宮頸がんは出産に影響を与えたり、尊い命が奪われたりすることもあります。国内では、年間で約10，000人が新たに発症し、約 2,700 人が子宮頸がんによって命を落としています。

◎子宮頸がんの原因

子宮頸がんの原因は、ほとんどが「ヒトパピローマウイルス（HPV）」の感染によるものです。

このウイルスは主に性交渉で感染しますが、特別なウイルスではなく、女性の約8割が一生に一度は感染するごくありふれたウイルスです。

そして、このウイルスに感染した全ての人が子宮頸がんになるわけではなく多くの場合は自然に排除されますが、ごく一部が長い期間をかけて「前がん病変」へと変化し、その一部が「子宮頸がん」に進行します。

≪子宮頸がんワクチンとは？≫

HPV は100以上の種類がありますが、主に子宮頸がんの発症に関与する高リスク型（16型・18型等）と低リスク型（6型・11型等）に分けられます。高リスク型の中でも16型・18型による子宮頸がんの発症の頻度が最も多く、全体の約7割を占めています。また、低リスク型は皮膚や粘膜にできるイボなどの原因となります。これらの HPV 感染を予防するのが、子宮頸がんワクチンです。

しかし、子宮頸がんワクチンは全ての発がん性HPVの感染を防げるわけではなく、100％子宮頸がんを予防することはできません。予防接種を受けたからと安心せず、今後定期的に子宮頸がん検診を受診することが大切です。

◎ワクチンの種類

ワクチンの種類は3種類あります（サーバリックス・ガーダシル・シルガード9）。各ワクチンの詳細とどのワクチンを接種するかは、裏面【子宮頸がんワクチン説明／比較表】を参考にして本人及び保護者が判断してください。※基本的には同じワクチンを3回接種します。ただし、医師と相談のうえ、途中から9価ワクチンに変更し、残りの接種を完了することも可能です。

◎ワクチンの対象年齢

サーバリックスは10歳以上、ガーダシルとシルガード9は9歳以上で接種可能ですが、子宮頸がんワクチンの有効性が最も高くなるのは、HPV に未感染でかつ免疫効果が高いと考えられている10歳～14歳で、この年代で接種すると、高い予防効果が見込まれます。

◎子宮頸がんワクチンの受け方

ワクチンの種類	標準的な接種間隔		接種回数
2価／ガーダリックス	初回接種から1か月後に2回目、初回接種後6か月後に3回目		3回
4価／ガーダシル	初回接種から2か月後に2回目、初回接種後6か月後に3回目		3回
9価／シルガード	15歳未満	初回接種から6か月後に2回目 ※間隔は少なくとも5カ月あける必要があります。5カ月未満で接種した場合、3回目の接種が必要となります。	2回
	15歳以上	初回接種から2か月後に2回目、初回接種後6か月後に3回目	3回

◎接種後に見られる副反応

接種をしたあとは、注射した部分が痛んだり腫れたり、かゆくなったりすることがあります。通常は数日間で治まります。重い副反応としては、稀にアナフィラキシー症状（血管浮腫、じんましん、呼吸困難など）があります。詳しくは厚生労働省で発行しているリーフレットをご覧ください。

出典：予防接種と子どもの健康・予防接種ガイドライン2023年度版〔公益財団法人予防接種リサーチセンター〕

【子宮頸がんワクチン説明／比較表】

ワクチン呼称	サーバリックス®	ガーダシル®	シルガード９®
型	16型･18型の2価	6型･11型･16型･18型の4価	6型･11型･16型･18型･31型･33型･45型･52型･58型の9価
ワクチン接種による予防適応疾患	子宮頸がん（扁平上皮細胞がん、腺がん）、子宮頸部上皮内腫瘍	子宮頸がん（扁平上皮細胞がん、腺がん）、子宮頸部上皮内腫瘍、上皮内腺がん、外陰上皮内腫瘍、膣上皮内腫瘍、肛門がん、肛門上皮内腫瘍、尖圭コンジローマ	子宮頸がん（扁平上皮細胞がん、腺がん）、子宮頸部上皮内腫瘍、上皮内腺がん、外陰上皮内腫瘍、膣上皮内腫瘍、尖圭コンジローマ
接種要注意者	⑴血小板減少症や凝固障害を有する者 ⑵心臓血管系疾患、腎臓疾患、肝臓疾患、血液疾患、発育障害等の基礎疾患を有する者 ⑶予防接種で接種後2日以内に発熱のみられた者及び全身性発疹等のアレルギーを疑う症状を呈したことのある者 ⑷過去にけいれんの既往のある者 ⑸過去に免疫不全の診断がなされている者及び近親者に先天性免疫不全症の者がいる者 ⑹妊婦又は妊娠している可能性のある女性 ⑺本剤の成分に対してアレルギーを呈する恐れのある者		
接種後の注意点	接種直後又は接種後まれに、アナフィラキシー様症状（血管浮腫・じんましん・呼吸困難など）等がおこることがあります。 また、注射による心因性反応を含む迷走神経反射として失神、めまい等があらわれることがあります。接種後30 分は接種した医療機関に残り様子を見ていただきます。 接種当日、入浴は差し支えありませんが、注射した部位をこすることはやめましょう。また、激しい運動は避けましょう。		
接種後の副反応	注射部位の副反応は、痛み（99．0%）、発赤（88．2%）、腫れ（78．8%）です。全身性の副反応は、疲労感（57．7%）、筋肉痛（45．3%）、頭痛（37．9%）、胃腸症状（悪心、嘔吐、下痢、腹痛等、24．7%）、関節痛（20．3%）、発疹（5．7%）、発熱（5．6%）、蕁麻疹（2．6%）でした。	注射部位の副反応は、痛み（84.8%）、紅斑（30.2%）、腫れ（25.4%）、掻痒感（5.0%）です。全身性の副反応は、発熱（5.8%）、頭痛（4.0%）、臨床検査値以上変動（0.8%）、白血球数増加（0.4%）でした。	注射部位の副反応は、痛み（81.9%）、腫れ（44.9%）、紅斑（40.2%）、掻痒感（9.4%）、内出血（3.9%）、腫瘤（3.1%）です。全身性の副反応は、頭痛（3.9%）、発熱（3.1%）、悪心（2.4%）でした。
効果の持続期間	現時点では、初回接種から、国内臨床試験にて4年後までの100%予防効果、海外の臨床試験にて最長9．4年間ほぼ100%の予防効果が認められています。	海外の臨床試験にて3回接種後から最大14年間、HPV16及び18型に関連した疾患の発生はなかったことが報告されており、現在も延長試験が進行中です。	海外の臨床試験にて、9～15歳は3回接種後から最大8.2年間、16～26歳は最大9.5年間は有効性が持続するとの報告があり、現在も延長試験が進行中です。
接種途中のワクチン変更の禁止について	2回目、3回目の接種時にガーダシルワクチンへの変更はできません。	2回目、3回目の接種時にサーバリックスワクチンへの変更はできません。	原則として同じ種類のワクチンを接種することを勧めるが、医師と相談のうえ、途中から9価ワクチンに変更し、残りの接種を完了することも可能

出典：サーバリックスワクチン添付文書〔グラクソ・スミスクライン株式会社〕、ガーダシルワクチン添付文書・シルガード9ワクチン添付文書〔MSD株式会社〕
予防接種に関するQ&A　2022年度版〔一般社団法人　日本ワクチン産業協会〕

お問合せ　役場　健康福祉課　健康係　TEL：29－5624（直通）